

られて歩いたきれ〜の印象ですがね。いゝえ、それは川上の親達ぢやないんです。私は小さい時分川上に貰はれて来たんですから……。随分、私は其時分旅をして歩いたさうですよ。讃岐の金比羅などへ行つたのを覚えてゐますからね。日光へ駕籠に乗つて行つたのも覚えてゐます。京都の東山などもよく覚えてゐます……。母親といふ人が何でも若い綺麗な人で、笑ふと、かう言ふに言はれない愛嬌のある顔でした。……うの顔を覚えてゐますよ」

「それは、面白い、是非お書きなさい」と私が勧めると、

「何うも、しかしさういふもんですからね、餘程、巧みな形式で書かないと、本當の味が出て来ませんからね」

かう言つて躊躇して居た。

幼ない童の眼に切れ〜に映つて、ろして永久に消え去つて了うたやうな現象は、遂にかれの筆に上らずに終つたのは、返すくも惜しいと思つてゐる。

かれの死を聞いた時、私はかれについてのいろ〜なことを頭に浮べたが、かねて聞いてゐたろのロマンチックな幼い映象が繪のやうになつて私の眼の前を通つて行つた。

綺麗な若い母親に抱かれた男の兒……、酒に溺れて三崎半島をめぐり歩いた『ふところ日記』作者……、藝術の孤獨の底に落ちて再びそこから出ることの出来なかつたさびしい詩人……。

眉山の死は、新しい文學の勃興の渦巻の中で行はれた。

古い習俗の破壊、幻影の破壊、義理人情の破壊、さういふ思想が潮のやうに漲り渡つた時に於て、かれはあのロマンチックな一生を手づから破壊し去つたのであつた。そこに意味がある。

生活と藝術、實行と藝術——さういふ問題がそれから段々起つて來た。作者は、『生、然らずんば死』の問題まで肉薄して行くやうになつて來た。

モウパッサンの死、ガルシンの死、さういふ例を此處に引いて、ろして眉山の死と比較する譯ではないが、一面から見れば、無論

眉山の死は藝術の孤獨といふ境から發足して來なければならぬ問題である。

『だから、家庭をつくるもんぢやない。妻や子供を何うする？』かう高瀬文淵も言つた。

しかし、それは何うすることも出来ないやうな人生の矛盾である。家庭をつくつたり、妻や子供を持つて見なければわからないやうな人生でありながら、藝術家に取つては、圓滿な家庭などに慰められてろして満足してゐられないやうなところがある。妻や子供などに縛られては居られないやうな生々としたところがある。

眉山は家庭を家庭らしいものにせず、長い間暮してゐた。書生と婆やと可愛い小犬と、それを相手に、眉山は藝術の孤獨を楽しんでゐた。しかしその生活は餘りにさびしかった。殆ど堪へられない程淋しかった。さういふ生活の中に俄かに入つて來た新妻は、寧ろ不幸福の運命を最初から持つてゐたと言つて差支へなかつた。妻を迎へても、子を持つても、藝術の孤獨は既に深くかれの肉體に蝕ひ入つてゐた。かれはそれには満足することが出來なくなつてゐた。

### 春雨にぬれた旅

志摩から伊勢、紀伊と旅して行つた時のことが第一に思ひ出される。其時、私は糸立を着て、草鞋を穿いて歩いて行つた。濱島から長島までの辛い長い山路、其處には桃の花の咲いてゐる畑もあれば、椿の花の緑葉の中に紅く簇つてゐる漁村もあつた。五ヶ所を通つた時は、空のよく晴れた日で、渡つて行く舟の櫓の音が、湖水のやうな静かな入江に響き渡つた。

蒼い顔をした、眞面目な、物に感じ易い一青年が、袂に手帳を入れて、村から村、海岸から海岸へと辿つて行つたさまが、繪のやうに眼の前に見えて来る。まだ其頃の私には、憧憬の悲哀と言つたものより他に、別に苦しい辛いものもなかつた。醜いもの、汚れたもの、正しくないものに眼を閉ぐことの出来た其頃の頭腦には、天然は唯美しいもの清いものとしてのみ映つた。

野に耕す農夫や、畑道に急ぐ娘や、濡れた帆を干して居る漁師の舟や、さういふものは總て繪のやうに平和で、そして美しいものであつた。贅といふ船着で、隣の室に若い男と女が戯れて終夜騒いで居ても、袂の手帳に歌をかきつける餘裕を失はないやうな

のが其時の私であつた。

十里、二十里、海岸の低い山は低い山へと續いて行つて、昇り降りが多い路は容易に盡きようもしない。山の間から思ひもかけない廣い大洋が見えたり、一帆の影の危く敬つて動いて行くのが見えたりした。谷間のさびしいところに世を離れて住んで居る人々の單純な生活は、何んなに深い印象を與へたか知れなかつた。夕日に彩られた時、其處を私は郵便脚夫をしてゐる敏捷な少年と路伴れになつて越えて行つた。下に見える村をたしか錦浦と言つたと記憶して居る。少年は血の多い若々しい頬に夕日を受けて、其朝見つけて置いたといふステッキになる樹の枝を切つて、その

皮を剥ぎながら並んで行つた。此少年は此等あたりに、冬になると出る猪の話を面白く話して聞かせた。『大きいのはあれ位あります』かう言つて、谷の流に架つて終日米を舂いてゐる野碓の小屋を指し示した。

峠の上からは、南伊勢から紀州に連る長い海岸線と高い複雑した山岳とが打渡して見られた。近い處は日を帯びて、明るい鼠色になつて居たが、遠い處はもう濃い影が出来て居た。弓のやうに連り渡つた海岸には白い波が立つた。

『向うの岬が木の本の鼻でさ』  
かう其少年は教へて呉れた。

紀州の海岸百十數里、其處には新宮の町もあれば、日本第一の稱ある那智の瀑もある。熊野川の流、静八町の谷、私の心は其海と其山とに向つて烈しく波打つた。

紀州は暖かい國であつた。行つて見ると、其處には菜の花が咲いて居た。蛙が鳴き立て、居た。海岸の家畑には、夏蜜柑がらの黄ろい大きな實を艶の好い緑葉の中に見せて居た。風の寒い伊勢志摩から比べると、かうも違ふかと思はれるほど氣候が暖かであつた。此國の沖に近く、暖流が西から東へと流れて居た。

其處で私は春の雨中の旅の味をつくつく味つた。熊野川の谷を溯る時も、静八町の溪に船を泛べる時も、玉置山に大塔の宮の

遺蹟を偲ぶ時も、柔かな細い雨が常に私の旅の衣を沾して居た。ろれに山櫻が到る處に咲いて散つて、ろれが雨にぬれたキャラコ  
の黒の三紋の羽織にいつまでも貼いて居た。

## 東京の郊外

東京の郊外には、烏渡他に見ることの出来ない特色がある。ろれは京都にも大阪にもない特色で、何處か野性に富んだやうな、粗けづりの中に素朴な自然を隠してゐると言つたやうな風である。

つまり武蔵野が持つてゐる特色である。唯、廣い野原―ろればかりであるが、ろれでも地平線の廣いのは他では見られない。ろ

れに、富士がこの郊外を飾つてゐる。

ろの玲瓏とした姿は、何處からでも見ることが出来る。川の土手の上、榛の林の上、茅葺屋根の上、古い祠の上—それの見える處は指を屈するに暇がない位である。また時によつてそれがいろいろな色に見える。夕暮の紫色の富士などは殊にすぐれたものの一つである。

二三百年前までは、今の東京の市街のある處は全く海邊で—沮洳で、日比谷あたりには波が寄せてゐたといふ。今の皇居のある處には平川天神の社があつて、ろこは眺望の好い處として、人々が參詣に來たといふ話だ。道灌山の下あたりも、曾ては波の寄せ

たところで、つい此間まで道灌舟繫の松などといふものが残つてゐた。

利根川と荒川と多摩川、この三つの川は東京の郊外に限りなき色彩を與へてゐる。この三つの川がなかつたら、東京の郊外は、餘程特色を失つて了つたであらうと思はれる。この中で、多摩川が一番源に近いだけに一番荒い瀬をなしてゐる。關戸附近では、まだ荒い石川の趣をなして流れてゐる。二子あたりでも、まだ舟が完全に通行が出来ない。で、三つの川の中で、一番下流まで鮎が捕れる。

多摩川の沿岸では、二子は電車の便があるので、都人士はよく

出かけて行く。鮎時分には、鮎狩の屋根舟に幔幕を張つて、三味線の音を水に流しく行く人達もある。對岸には、龜屋といふ旅館兼帯の料理屋があつて、その二階の一間からは、多摩の清い流が見える。新緑の頃か秋の晴れた日か其處に行くと、世を忘れたやうな暢氣な心持になる。

關戸附近は、昔、鎌倉街道のあつた處だけに、今の時分の古蹟が澤山残つてゐる。例の分倍河原を始めとして、百草、府中、大國魂神社など皆の頃の歴史を語つてゐる。義貞が笠懸野に義旗を擧げて、利根、荒川の二水を渡つて、此處まで押寄せて來た光景は今でも宛として眼の前にあるやうな氣がする。

百草の山の上から見た眺望は、東京の近郊では多く得られない眺めである。それに境も閑靜である。そこまで行く路も面白い。唯惜しいのは、山上に酔を買ふに足りるやうな一旗亭すらもないことである。

荒川と多摩川との間には、今日でもまだ昔の武藏野の面影を見ることが出来るやうな廣い野がある。國分寺から岐れた川越鐵道の駛走する所がそれである。田無、入間川、所澤などといふ町が其の半は平野半は小丘陵をなしてゐる間に散在してゐる。國分寺驛の近所には、國分寺の址があるし、境驛の南には、天平時代の古刹深大寺がある。青梅街道は新宿から荻窪、田無を経て新町へ



と通じてゐるが、ろの茫々漠々たる光景は武藏野の昔の特色を名残なく發揮してゐる。

國分寺の址は是非一訪しなければならぬと思ふ。それは小金井の花の雑踏と、丁度背中合をしてゐるやうな感じを與へる處で、礎だの、門前の址だのは今日でも依然として指點することが出来るやうになつてゐる。ろれに、寺の感じが好い。廣い靜かな書院で、僧から繪葉書を所望して、ろれを都の友に頒つなどの興は他に多く得られない。寺の庭には大きな紫陽花が日に照つてゐる。深大寺は江戸名所圖會には、蕎麥の名所として書いてある。その寺内數畦の地が殊に蕎麥の栽植に適してゐるので、わざ／＼東京

から新蕎麥を食ひに行つたものさへあつたといふ。今では、しかし蕎麥は食へない。けれど境内は樹木が繁つてゐて、瀧が蛇の口から落ちてゐる。避暑の客がろれでも少しは遣つて行くと思へる。武藏野特有の榛、櫨、栗などの林がこの附近に多い。春の若芽の色だの、秋の落葉の私語だの、實際詩趣に富んでゐるのは、この雑木林だ。木の葉の間から日影がチラ／＼と線をなして落ちて、小鳥が好い聲を立て、鳴く……。

汽車の音、でなければ、田舎道を駛つて行く馬車の喇叭の音。所澤は鳥渡趣に富んでゐる町だ。丘といふほどの丘ではないが、雑木林、松林などを隔て、ろの西の方に一帶の低い丘陵があ

る。織物の産地としてかなり名高い。殊に近頃は飛行機飛揚を以つて聞えてゐる。

川越街道は、板橋から岐れて、練馬、白子などといふ所を通つて行く。膝折、大和田などといふところが川越に行くの途上にある。

この川越街道と中仙道との間を荒川の水は北から南へと流れ落ちてゐる。この川は多摩川に比べると、もう餘程中流の趣を具へてゐて、帆を揚げた舟なども通つてゐる。蘆荻なども茂つてゐる。しかしその流域は多くは田圃の間で、これはと思ふやうな風景に乏しいのは遺憾だ。勿論、この川も上流に行くと、かなり風景に

富んでゐる。上武鐵道の沿線―武川、寄居などは、鮎も非常に多く捕れるし、流も早瀬になるし、秩父の山の翠色も近くなつて、雲の面白い姿も見られる。ろれに、鉢形城址などといふ立派な古蹟もある。

荒川は東京のセイヌと言はれてゐる。しかし、ろれにしては、稍々風致に饒かでないやうな氣がする。

戸田の渡しあたりは殊に平凡だ。ろれに船着と言つたやうな繁昌した處もない。赤羽には、太田道灌の像を藏した静勝寺がある。岩淵町は汽車の爲めに開けた新開町で、茅葺と瓦葺とが雜つてゐて、工兵隊の兵卒がぞろ／＼通りを通つて行く。川を隔てた川口

町は、鑄物の多く出来るところで、ろこからは、陸羽街道と中仙道との中間にある岩槻街道が出て行つてゐる。この街道はまだ江戸のなかつた頃からある古い街道で、岩槻の古城址は其時分の歴史を語つてゐる。

荒川の白帆、ろれが榛の疎な樹立を透して、チラ／＼見える。

これは飛鳥山あたりから見た光景だ。川は千住あたりに來ると、急に下流らしい趣を呈して來て、ペンキ塗の汽船だのボートだのが頻繁に往つたり來たりする。煤煙―汽笛、川は俄かに都會の巴渦の中に入つて行く。

三叉あたりには、まだろれでも蘆荻が多く残つてゐて、夏は割

葦の聲が聞かれる。郊外と都會との接觸點―其處には茅葺屋根の百姓家があつたり、小さい渡船小屋があつたり、別荘らしい家があつたりして大きい會社の汽笛が時刻ごとに凄しく川に鳴り響いて聞える。

長い向島の土手、白鬚あたりから奥には、静かな夏が味ははれる。入口に紫陽花が咲いてゐて、室からは溶々たる流の見える瀟洒な水樓などもある。三味線の音が静かな水に落ちて流れて行く。

荒川の西と東とは、郊外の趣きが餘程違つて來る。西の方は地平線上に山があり、田圃に雑木林が多いが、東に來ると、雑木林も少くなるし、山も遠く少くなる。地も全く沖積層になつて了

つて、チク／＼した沮洳が到る處にある。

荒川の西では、秩父連山が其後を劃つてゐるが、東では、見渡すかぎり殆ど山がない。唯、筑波の雙尖が驢馬の耳を立てたやうに見えるばかりである。勿論、金町、龜有附近からは、日光連山や赤城連山が見えるが、それも非常に遠いので、郊外の背景を塗つた山といふ感じは多く起つて來ない。

中川は利根川と荒川との分流である。本當は昔の荒川の残水路であるが、利根川の注入が非常に多い。古利根の一部だと言はれる理由もかなり強い理由で残つてゐる。

荒川や多摩川に比べると、この中川はまた非常に趣が違つて來

てゐる。上流も中流もなく、下流ばかりで成立つてゐる川である。従つて蘆荻や蒲葦が多く、薄が多く、水が黒く淀んでゐる。鮒や、鯰や、鰻が多い。ろれに屈曲の多い川で、水郷の趣に富んでゐる。

この川に接して、新宿といふ陸羽街道の一古驛がある。龜有とこの驛との間に、長い橋がかゝつてゐて、橋錢を取る。汽車が出來てから全く閑却されたやうな宿場で、東京近郊に、こんな淋しい古驛があるかと思はれる許である。この附近は都會に供給する野菜をつくるので聞えてゐる土地で、こゝから南の方、葛飾、葛西は田よりも畑が多く、葱、茄子、胡瓜、里芋などが盛に出來る。

肥し溜の路傍に多いのも他には見られないもの、一つである。そしてこれ等の農夫は、毎朝、千住の青物市場へと車に載せて出かけて行く。

柴又の帝釋天はそこからもう僅かである。郊外散歩者の爲めには、是非行つて見なければならぬ處で、西新井の大師などと名を齊うしてゐる。金町の停車場から、人車に通じてゐて、汽車から客が下りる度に、饅頭笠を冠つた人足が蠡蜋のやうに、ヒヨコヒヨコあとから車を推して行く。今は本所から電車がある。

帝釋天から一町ほど行くと、小利根の土手に出る。晩秋だと、蘆荻を人が長い鎌でサク／＼刈つてゐたりする。土手の上の櫻の

紅葉したのも綺麗である。藍のやうな水には、白帆が幾つとなく通つて行く。

其處には、川甚といふ川魚料理店がある。その離座敷は川に臨んでゐる。欄干に凭ると、鴻の臺一帶の丘陵が前に見えて、溶々たる大河は繪のやうに流れてゐる。利根川の鯉は都人士の賞玩する所である。

東京の近郊にある行つて見たい料理店を此處に擧げて見たくなつた。それは存外多くない。もう少しあつても好いと思ふ位である。先づこの川甚、次に多摩川二子の龜屋、少し遠く隔たつて、栗橋のいなり屋、先づこの位なものだ。

栗橋のいなり屋は遠いけれど、是非行つて見なければならぬところである。奥羽線の栗橋驛から下りて、町を通り抜けて、一町ほど行つた土手の上にある。水樓は高く利根の大河に臨んでゐて、水光はキラ／＼と人の面に反射する。二階の廣々とした眺めも好いが、下座敷の庇の長い一間も好い。

水樓の下には船がいつも五六艘かゝつてゐて、船頭の鼻が漢垂らしの子供をしかり飛ばしたりしてゐる。子供はまた子供で、鐵のやうな肌の色をした體をポチャンと川の中に沈ませたりなぞしてゐる。大きい帆を張つてやがて發つて行かうとしてゐる船などもある。其の多くの船の中に、一艘大きな錠の下りた生洲舟があ

つて、客が來ると、家の若い衆は又手綱と大きなざるごとを持つて、ろこに行つて、ガチャ／＼と錠前を外して、ろこから大きな鯉や鯰をすくひ上げる。鯉の鱗がピカ／＼と暑い日に光る……。

近所の泥沼で捕れた鯉や鰻でも、この川に二三日もつけておくと、全く利根川で獲れた鯉と同じ味になるさうである。

私は暑い夏の日、午前十一時頃から夕方まで其處で遊んでゐたことがある。静かな夏の晝、實際静かな日であつた。對岸の森の中で鳴いてゐる蟬の聲が手に取るやうに聞えて來て、色ある雲が日影を帯びて、美しく川に映つてゐる。ろの間を帆が行く。ギーと櫓が鳴る。

都會から遠くは離れてゐない、しかし旅に出たといふやうな氣持—さうした氣持を得たいと思つたら、其處に行くに限る。

東京をめぐる川はせめて利根川位の大きさがあつたらと私はいつとも思ふ。隅田川では、何うも狭すぎる。殺風景すぎる。うれに大河の趣といふやうな溶々とした所がない。

鴻臺は昔は江戸からよく人が遊びに行つた處だが、兵營が出来てから、その眺望はすつかりその兵營に占領されて了つて、今では昔のやうではない。それでも市川、中山あたりからかけて散策には持つて來いだ。

中川と小利根との間は、小松川や、船堀や、宇喜田などといふ

地名のある所である。小利根の岸には、行徳、欠真間などといふ所がある。此處あたりになると、東京の郊外と言つても、もう餘程海に近く、うれほど興味をひくやうなところもない。唯、行徳に杜若の名所があつたが、今は何うしたかしら？

房總線の鐵道と常盤線の鐵道との間は、東葛飾郡の地で、原野と丘陵と相接してゐる。松林なども多い。小金ヶ原、習志野などの廣い原が相接してゐる。

東京の靈岸島を出で、小名木川を通つて、中川から小利根に出て、うれから上流に遡つて行く汽船通運丸の航路は、頗る東京の郊外に於ける趣に富んでゐる。其處には鴻の臺の臺地があつ

たり、松戸の渡場があつたり、味醂で名高い流山の町があつたりする。水郷の趣は到る處にこれを見ることが出来る。西、北の郊外に見ることの出来ない水郷の美を此處に見出すことが出来る。

西郊に見る自然は、野の趣味、林の趣味、古驛の趣味である。また富士を背景にした趣味であるとも言へる。南郊はや、丘陵に富んでゐる。海にも川にも近い。しかしろの感じはや、浅いとも言はれる。大森、川崎邊は單に田園の趣味にすぎないやうな氣がする。

北郊は西郊に似てゐるが、しかし西郊ほど林や丘や森に富んで

ゐない。北郊の中心をなしてゐる荒川もさほどすぐれた景色を私達の前に展開して呉れない。西郊ほど豊富な趣と色彩とを持つてゐない。けれど西郊と同じく矢張山の空氣が四邊に充ちてゐる。海らしい氣分、水郷らしい氣分、柔かいのんびりした氣分、さういふ氣分を持つてゐるのは、東郊である。

東郊には西郊乃至北郊に見るやうな、山野の氣分に充ちたやうな光景を探し出すことは出来ない。榛の林のかはりに、蘆のさ、やきがあつたり、鳥の囀りの代りに、割葦の饒舌があつたりする。其處には地平線を劃る翠微の光線の變化を見ることが出来ないが、その代りに、白帆や、船着や、渡船小屋などの水彩畫に接す



ることが出来る。

東京灣は矢張東京の郊外として取扱はるべきものであるが、不幸にして、この海は何等のすぐれたる特色ある自然を私達の前に展開して呉れない。濁つた海、塵埃の充ちた海、それより他に何物もない。

### 秋祭の頃の日記

九月十三日。

今年は脚氣がいくらか好い。これも此頃酒をやめて居るからだと思ふ。しかし酒を飲まないで甘い物が食ひたくなる。しる粉などを此頃はよく拵へて食ふ。

今日も出勤。太陽の小説を書くつもりであつたが、何うしても出来ない。日限を待つて貰つた鈴木君や中原君にも濟まないが、

仕方がないから來月まで待つて貰ふことにした。校正だの、編輯だの、いろ／＼な仕事をして四時に歸る。二三日前勤惰計が壊れて、其あとに帳面と鉛筆とが置いてある。館員の退出の時間が並んで書いてあつた。私も其處に四時十分と書いた。

昌平橋に來て、電車に乗ると、もう家に歸つたやうな氣がする。この電車は早いのと涼しいのとでいかにも氣持が好い。千駄ヶ谷あたりに來ると、郊外の廣い空が展けてほつと呼吸がつける。

『髪』の稿を起してからの書齋生活は、毎日判を捺したやうに同じだ。家に歸ると、屹度行水の湯が沸いてゐる。ろれを遣つて、頭と顔とを水で洗つて、夕飯の出來るまで書齋の籐椅子の上に身

を横たへて、敷島を二三本燻らす。梧桐を透してさし込んで來る夕日は此頃では大分西に寄るやうになつた。涼しい風に吹かれて蘇つたやうな氣分であると、五歳になる女の兒が『とうさん御飯』と屹度知らせて來る。晩酌をやめたので、夕飯も至極簡単にすんで了ふ。日の暮れる時分になると、細君はろろ／＼書齋に坐る支度をして呉れる。机と籐椅子と電氣ランプとを中に入れて蚊帳を釣つて、傍に煙草盆を置く。番茶の香ばしく焙じたのを盆に乗せて持つて來る。

私は筆を執る前に、先づ籐椅子に身を横へる。これが十分で書く氣になるか、三十分で書く氣になるか、鳥渡わからない。時に

は夜の十時頃までさうして椅子に横つて居ることなどもある。しかし何んなに遅くなつても、一回書かすには寝ないことに定めて居る。

今日は四時間ほどかゝつて漸く一回出来た。「髪」(四十五) 在中と封筒に書いて、婢にそれを近所の郵便箱に持つて行つて入れさせる。暫くすると、細君が子供を寝かして起きて来る。縁先に茶道具などを出して、茶を飲んだり菓子を食べたりして寝る。

十四日。

霧が籠めてゐる。今日も暑くなるだらうと言ひながら朝飯を食ふ。子供達は學校に出かける支度をして袴など穿いて居る。鞆を

肩から下げて出かけて行く男の兒もある。子供が出懸けると、跡は静になる。籐椅子の上で、新聞などを讀む。十時頃になつて出勤。

夜、蟲の音を聞くのが此頃の樂みの一つだ。何處から来たか、轡蟲が向うの垣で毎晩鳴いてゐる。裏の家には鈴蟲が飼つてあつて好い聲を立てゝゐる。コホロギの聲もすれば、肩させ裾させの聲もする。子供が捕へて来て箱の中に入れて置いたスイトも鳴いて居た。

十五日。

此頃は大分氣分が落ちて来たやうに思ふ。平凡で好いんだ。

平凡だなどと思ふのはまだ何處か無理なところがあるからだ。現象は平凡でも不思議でも何でもないのだ。醉生夢死と言ふことは卑むべきことのやうに昔から言はれてゐるが、醉生夢死が出来なくつて苦んだり悶えたりして居る人も餘り誇ることの出来るものではないといふことを考へて見た。醉生夢死の出来る人の方が幸福だなどとも考へた。

何うかすると、編輯部の大勢居る中で、机を並べた前田君と文藝談だの人生談だのをすることがある。今日も少しばかり話し合つた。牛込の山の手に住んで居た時分のことを思出す。

夕方白石君の家に行つて見る。歸つてから「髪」を一回書く。

十六日。

今朝起きると、雨が降つて居て、庭石が氣持よく濡れて居る。出勤する前に、筆を執つて見る。書けぬのでやめて了ふ。庭に咲いて居る水蓮に雨の降り濺ぐのがいかにも繪のやうだ。午近く雨を衝いて出勤。

十七日。

日曜日。忘れもしない五年前の今日は、牛込の山の手から、此處に新に家を建てたる計畫をして、大工と受負師と一緒に遣つて来て、初めて繩を引いて見た日だ。其頃は此處等はまだ代々木野の一部で、周囲は殆ど野原であつた。ブリキ屋根の家が一軒、牧場

のある牛乳屋が一軒、貧しい労働者の住んで居る汚い長屋が遙か  
 向ふに一棟、前も後も皆な甘藷畑、麥畑、大根畑などであつた。  
 私達の繩を引いた處は、綺麗な斜草の畠で、後に栗の林と樺の林  
 とを帯びて居た。大工と受負師が棒杭を打つて、せつせと繩を引  
 いて居る間を、私は栗林の中の木蔭に蹲踞んで、じつと見て居た。  
 一緒に來た甥は栗の熟してゐるのを見つけて、棒をなげたり、ス  
 テツキを投つたりしたが、まだ一つも栗を落さない中に、ステツ  
 キを高い木の枝に引かけて了つた。止むなく甥は木の幹に上つて  
 行つたが、其時取つて來た栗の實を其處で食つたことを今でも覺  
 えてゐる。五年間は處に由つては餘り長い年月ではない。此間旅

行した日光の山の中では、二十年前と少しも變らない家だの、茶  
 屋だの、寛だのがあつて、移り變りの少ない平和な山の生活を羨  
 しく思つたが、都では、到底ろんなことを望むことが出来ない。  
 五年の中に、野が町になつた。麥畑や田が賑かな便利な屋敷町に  
 なつた。それにも比べて劣らない變化は私の身の上にも起つてゐ  
 る。精神の上にも起つて居る。別な人間かとも思はれる位である。  
 生効のあるやうな氣もすれば、情けないやうな氣もする。かう思  
 ふと、これから五年後のことなども思ひやられる。

此頃は日曜日一日は、ゆつくり遊ぶことにきめて居る。午後か  
 ら細君の兄が遣つて來た。これから酒でも飲まうかと思つてゐる

と、水野仙子が遣つて来た。ついで細君の姉が遣つて来た。「さうかね、もう五年になるかねえ、早いものだね」などと姉は言つた。

九時頃まで賑やかに話して義兄と姉と一緒に歸つて行つた。

十八日。

晴れて暑い。出勤。

日の暮れる時分、十歳になる男の兒はそこへ遊びから歸つて来て、「母さん、僕は變なもの見ちやつた！」と言ふ。何かと聞くと、子供の井戸に落ちて死んだのを見たのだといふ。「何か井戸の中でアバ／＼してるから、何んだらうと思つて、正ちゃんとの

ぞいて見たら、子供が落つこつてゐるんだもの、僕は吃驚しちやつた……それから僕は伯父さんに教へてやつたら、伯父さん蒼青になつて驅けて来て井戸に入つたよ」

引揚げた時は子供はもう死んで居た。「僕は變な氣がしたから、別な方に遊びに行つちやつた！」

いかにも生々とした子供の觀察を私は面白いと思つた。アバアバして居た。その形容が幼稚で、單純で、うしていかにもよく真相をつかんで居ると思ふ。變な氣がしたから、別な方に遊びに行つた。これも面白い。子供らしい状態がよく活躍してゐる。私は子供の見た子供の死といふことを書きたいと思つた。

感覺のフレッツシといふことは私達の常に念頭に置いてゐることであるが、何うもそれが古く鈍くなり易い。驚異の情と理解の念と其處に多少の矛盾もある。「髪」を書き始める前に、こんなことを考へながら、長い間例の籐椅子に横つてゐた。仕事を終つて、縁側に居ると、蟲の聲が雨のやうに聞える。村の若者の稽古してゐる神樂の音も遅くまで聞えてゐる。

十九日。

残暑になつてから、今年は暑くなつた。晴れた日はまだ單衣一枚で好い。朝、出勤の前に、新町の叔父来る。病人が段々よくなると言ふ。困つたものだ。かねて醫師から難かしいと聞いて居る

ので、挨拶に困る。この病人には幼稚な時分から随分世話になつて、今では親戚の中での唯一の伯母だが、それにもやがて別れなければならぬかと思ふと、黯然たらざるを得ない。段々目上の人達が死んで行つて、自分の寄りかゝる柱は次第に少なくなつて行く。そしてそれと反對に、自分はいつか寄りかゝられる柱となつて居ることに氣が附いた。出勤「髪」を書くこと例の如し。

二十日。

今日は久し振りで、信濃の神津猛君に逢つた。社の應接間で、島崎君と話してゐると、電話が島崎君の處にかゝつて来た。「君も何うです、お出になりませんか。久し振で、三人で飯でも食ひま

せう』かう島崎君に誘はれて社を終つてから出懸ける。川に臨んだ例の一間で、六年前に信濃に行つた時の話などをする。神津君は病氣だと言ふが、ろんな様子は少しも見えない。元氣で、快活で、若い力が談話の中に溢れて居る。四年前、獨歩の死んだ時鎌倉の電車の中で偶然逢つてから遂に逢ふやうな機會がなかつた。

初秋の大川端、何となく感じがフレッシュで心持ちが好い。空は半晴れて、星がチラ／＼してゐる。向ふ岸の灯は、水に落ちて、長く明るく揺いてゐる。橋の喧しい轟きも、夜になつてから却つて風情を添へるやうな氣がした。子供を二人聘んで、無邪氣なことを言ひながら、此頃の忙しさを忘れて話す。追分の古驛を見に

行つた話などをして、其時一緒に行つて辨子さんの許に繪葉書でもやらうといふことになる。處が繪葉書がないので、仕方がなく、宿の仕切判をたゞの端書にべタン／＼押して、ろくに名だの文句だのを書く。私は『大川の水にのぞめるともし火の影さやか也初秋にして』といふ即興の歌をそれに書く。

九時頃、其處を出て、島崎君と電車の處で別れ、神津君と須田町の角で別れる。瀧田樗陰君が可愛い女の兒をつれてゐるのにゆくりなく邂逅す。

二十一日。

今日は一日社を休んで書く。十二社のお祭だと言ふので、子供



達は學校から歸ると、慌てゝ出かけて行く。代々木の八幡の祭は  
 二十三日、若い衆がいつもの通り門に飾る造花を持つて来る。私  
 はこの頃が何となく好きだ。村の祭、夜毎に聞える神樂の音、ろ  
 れに野を行くと、木槿の花が咲いて居たり、木犀の香が何處から  
 ともなく匂つて來たりして、いかにも心持が好い。何うかして一  
 日餘暇を拵へて、靜かに秋の日影に浴したいなど、思ふ。午頃、  
 羽生の太田君からハガキ。遊びに來いと書いてある。久しく羽生  
 にも行かないなど思ひながら進まぬ筆を置いたり取つたりする。  
 午後三時頃から午睡をする。私は何んな疲れた時でも、一時間  
 か二時間眠れば、それで元氣を快復するのがいつもの例である。

日暮れ方、子供に起されて、夕飯を食ひ、今日からまた始まる地  
 誌の木曜會に出かけて行く。山崎君が洋行したので、何となくさ  
 びしい。大關君、佐藤君などと北海道の原稿の話をしたり地圖の  
 話をしたりして、十時半頃まで居る。代々木の停車場から家まで  
 の間を烈しい雨に降られる。家では此頃物騒だからと言つて、雨  
 戸を閉めて寢て居た。

港より島へ

私は細い汚ない町を通つて行つた。運送店、旅店、海産物を商ふ店、行燈を下げた飲食店などが兩側に續いた。腥い一種の臭が鼻を衝いた。

聞いて来た家はろの左側にあつた。別に船宿らしい特徴もなかつた。私は改めて、『向ふの島に渡る舟は此處から出るんですか』

と聞いた。

『え、出ます』

せつせと饅餡の玉を延してゐた亭主は、私の顔を見ながらかう答へた。上さんは湯氣の漲る大釜の中から熟つた饅餡を出しては傍の水桶に入れて冷した。

店には荒物だの、駄菓子を入れた箱だのが並べられてあつた。さうかと思ふと、棚の上には、徳利が幾本となく並べてあるのが見えた。

私は腰を懸けて待つて居た。

『誰が行くんだらう、この亭主が饅餡を打つてから行くんだらう』

か。ろんなに待たせられてはたまらんが』

こんなことを私は考へて居た。

其處へ七歳位の男の兒が飛んで入つて來た。と、

『おい、あんさ呼ばつてこ』上さんはかう言ひかけて、

『あのな、島さ行くんだツて、お客さんがあんだつてな。』

『何處へ居るだ、あんさ。』

『向ふへ居たべ。』

かう上さんが言つて、頭でしやくつて見せた。男の兒は駈出して行つた。

しかしその男の兒は久しく歸つて來なかつた。私は退屈して上

さんの水桶につけて居る饅頭を所望して一杯食つた。暫くすると、やがて裏からのろりと入つて來た男があつた。それが所謂兄さんであつた。

若い船頭さんは莫座を抱へて黙つて裏へ行つた。上さんは煙草盆に火を埋けて『では、行つて來やんしよ』かう言つて、私を誘つた。私は後に跟いて行つた。

一艘の傳馬はたぶく波に漂つてゐた。日が照つて居た。海の色はくつきりと深い碧を湛へて居た。

『今日は波があるかね?』

『少しあんな、風があるでな。』

かう言つて、若い船頭は静かに櫓を押し出した。

## 二

石垣を積上げた町家の裏——欄干を取廻した二階だの、裏口だの、雁木だの、赤い腰巻を出して物を洗つてゐる女だの、釣をし  
てゐる男だの、さうしたものが一つになつて日に照されて、キラ  
キラとして眼の前を通つて行つた。

濃い繪具をゴタ／＼と塗つた印象派の畫家の畫面から受けるや  
うな強い色彩の感じを私は受けた。

不整な、不規律な、歪んだやうな古い汚ない漁師町、その上は

すぐ高い／＼、丘阜になつてゐた。ろこには、潮風に吹晒された松  
が高く斜に靡いて居た。

松の中には宮があつた。其上には塗つたやうな濃厚な青い空—  
ポウといふ汽笛が遠くで聞えたと思ふと、海の濃い色の中から、  
白いペンキ塗の汽船が静かに動いて來るのが見えた。

煙突からは薄い鼠色の煙が揚つてゐた。

『何處から來た汽船だね？』

私はかう訊ねた。

『壹岐通ひの汽船でサ。』

今朝の五時に向ふを發つて來た船だ。かう船頭は話した。隔日

に壹岐がよひの汽船が此處から出る。かういふ話もした。壹岐！  
 對馬！ ろれは、私に遠く来た旅を思はせるに十分であつた。山  
 を越えたり海を渡つたりして漸く此處まで遣つて来た旅だ。一生  
 の中には一度は行つて見たいと思つて居てそして漸く來ることが  
 出來たこの絶海の半島の一角への旅だ。

汽船は段々近寄つて來た。汽笛の鳴る度に、白い湯氣の揚がる  
 のが明かに此方から見えた。三百噸ばかりの汽船、甲板に立つて  
 居る浴衣を着た女、白い服を着た船員、高く積上げた荷物、私は  
 胸の躍るのを禁めることが出來なかつた。一生の間行くことなど  
 はありはすまいと思はれる壹岐の港から來た汽船だ。私は私の船

の動搖するのも忘れて、おつとすれ違つて通つて行くの汽船に  
 見入つた。

汽船が港に近く入つて行くころには、私の船は、もうかなり廣  
 い海に出てゐた。大きな波につれて、船は上つたり下つたりした。  
 海門から沖へかけては船は皆な帆を一杯に張つて、白い大きな波  
 を蹴立て、ズン／＼出て行つた。長い絶壁に大洋の波の白く碎け  
 るのが見え出したと思ふと、今度は海の中に屹立してゐる高い岩  
 が見えた。その岩の周圍には、白い海鳥が幾羽となく飛びめぐつ  
 てゐる。

波は鼎のやうに沸き立つてゐた。

三

三十分後には、私は船を捨て、その島に上陸して居た。

『ぢや、此處に船を繋いで待つてゐますでな。』船頭はかう言つて、暑い夏の日影を避けるやうにして、岸にある懇意な休茶屋の方へと行つた。

リンネルの白い服を着た私の姿は、長い間、ろの海に添つた草山の下の細い路に見えて居た。日は明るく照つて居た。光線は緑葉の間からチラ／＼と私の服の上に落ちた。

草山の下の細い路——それは長い／＼路であつた。蟋蟀が鳴い

て居たりした。鬼蘇と、月草と、ろれから名の知れない濃い紫の小さな花とが到る處に咲いてゐた。

路傍に出て居た蛇が、人の足音に驚いてヌラ／＼と草の中に入つて行つたりした。

晴れた碧の海は絶えず私の眼の前にあつた。丘阜に據つた港町のゴタ／＼した色彩と、船や汽船の集つて居る光景と、燈臺のある島と、遠く大海の中に盡きてゐる岬頭と、ろこに押寄せて碎ける波と、碧い泡の堆積の上に碎けてゐる白い無限の波頭と……ろれが私の静かな世離れた心と眼とにびつたりと合つてゐるやうに私には思はれた。

明るい日影に捺したやうに出てゐる碧い海の繪だ。私はかう思ひながら時々立停つてそれに見入つた。

網を肩にかけて擦れ違つて行つた漁師があつた。

鐵のやうな色をした皮膚……深い毛の生へた脛……無邪氣な顔

……その漁師と擦れ違つてから少し行つた處に、大きな槐の樹があつた。

涼しい蔭をつくつてゐた。

草を敷いて、其處に休んだ私の姿は、長い間、其處から起き上

らうともしなかつた。向ふに歩いて行つた漁師の網についた金屬

が時々日影にキラ／＼光つた。……段々うの姿が小さく遠くなつ

て行つた。

荒布目を擔いだ女がまた其處を通つて行つた。

じろ／＼此方を見て行つた。

私はまた歩き出した。

碧い海を前にした草山の下の細い路は猶續いた。

四

静かな境内には、清水がちよ／＼と流れてゐた。

二千餘年を経た古い祠は、細い草山の下の路にあつた。石階を

五六階下へ／＼と下りて行つてゐた。華表の中には白木づくりの

社殿と、神樂殿と、それから少し離れて社務所があつた。白衣を

着けた禰宜らしい四十男が其處に居た。

蟬の鳴く聲がしんとした島の空気に沁み入るやうに思はれた。

曾て地圖を廣げて想像したこの絶海の孤島の古祠——二千餘年を経た著名な古祠、それがかうした眺望のない山の懐のやうなところにあらうとは思ひもかけなかつた。其處からは海も見えなかつた。

小さな池が其處にあつた。鏡のやうに澄んだ水で、其處には樹の影や草の影が深く映つてゐた。おいらん草が紅く白く日に照されてゐた。

緋鯉も二つ三つ居た。

私は静かに鈴を鳴して、禮拜した。私は綺麗に掃除してある社殿の上に靴を脱いで上つた行つた。私の白い服は、暫しの間、神聖の前や賽銭箱の傍や欄干の側などに見えてゐた。

静かな心持——今まで経験したことのないやうな静かな心持が其時私の胸を領した。賑かな町、騒がしい港、荒い海、さういふ處を通つて来て、思ひもかけずこの静けさに逢つた爲めか？それともまた長い年月を経た神社がこの絶海の孤島にあるといふことが私の心に力ある印象を與へた爲めか？それは何方だか知らないが、私は唯ちつとして其處に立ちつくして居た。私は長い旅路を振り返つて見るやうな人であつた。



電車の賑かな乗替場……長い間を晝夜を分たず駛つて来た汽車  
 ……幾人どなく逢つては別れ別れては逢つて来た多くの人々の顔  
 ……都に置いてあるなつかしい顔……さうしたものが鏡のやうな  
 静かな私の胸の中を一つく通つて行つた。

五

山懐にくつつ付いたやうになつてゐるこの島の漁師の部落が、  
 私の上つて行く山路のすぐ下に見渡された。日は矢張照つてゐた。  
 私はおへぎく登つた。海に面した神社の大華表は繪のやうに見  
 えた。

島の向ふに無限に展げられた大洋はやがて次第に見え出して來  
 た。港口では強いと感じた風も波も、大洋の面には何等の面影を  
 認めることが出来なかつた。縮緬のやうな波の皺に日がキラ／＼  
 と照りかゝやいてゐるばかりであつた。

帆が一つ二つ見えた。

行く路には、椿だの、山神だのが繁つてゐた。左の方の海も一  
 歩毎に段々見え出して來た。

頂には百坪ばかりの平地があつた。其處では、もう障るものな  
 く大洋が眼の前に展げられて見えた。絶海の半島の一角の鼻にあ  
 る島、その島の更に向ふに散點してゐる二三の小さな島、更にろ

の向ふにある扁平な大きな島。

晩秋の頃

秋は深くなつた。落葉ががら／＼と家の周囲を廻つて通る。朝から障子に日が當つて、雀がチャ／＼と鳴いて居る。芭蕉の葉は既に萎れた。

栗の實を拾ひに、競つて朝早く子供等の起きたのはつい此間であつたが、今は落葉が深く積つて、それを掃く音が高く聞える。朝焼火をした火が午後まで消えずに残つて、プス／＼と細い煙を

立て、居ることなどもある。近所の工場の物音も手に取るやうに聞えて、黒い煙が晴れた空にくつきりと靡く。

私の家は林の蔭にある。

風の日には、樹の鳴る音が波のやうに聞える。ことに大きい櫟の樹が多いので、普通の林などでは想像されぬやうな遠い高い音がする。大きい樹と言ふものは動いて居る時にも、静まつて居る時にも立派なものだなどと私は思ふ。

その櫟の木を側を通つて、右に曲つて、私はよく此處に遣つて来た。其頃、私の此家は丁度半分出来上つて、瓦師が書齋の屋根

に瓦を載てせ居た。あたりは大抵畑で、森には雑草が生茂つて、名も知らぬ蔓の色附いたのが薄く午後の日影に照されて居た。私は根太板の張られたばかりの書齋に上つて、いろ／＼なことを考へた。徒らに過ぎ去つた自分の半生——三人の人の親となつて、かうした郊外に家を定めやうとする境遇が染々思遣られた。『静かに讀書しよう、静かに筆を執らう』私は唯かう思つた。

それから三年はもう過ぎた。

周囲は非常に變つた。もう畑など見られぬほどの屋敷町になつて了つた。到る處の新しい家の庭を彩つてコスモスが咲いて居る。

夜は、瓦斯の光が家々から洩れて、村の垣道を明るくした。

庭では、植木屋が昨日の野分に吹倒された垣を修繕して居る。

『さうですな、建仁寺垣は、正直の處三年位しか持ちませんな』  
と其時言つた三年がもう來たのである。鋤や鍬が朝日に光つて、張つた繩の向ふに、通が見える。通には煮豆屋が鈴を鳴して通つて行く。

銀杏が一本、毎日通ふ道の角にあつた。

『銀杏は美しいものですねえ』とある日私と言ふと、

『ろら、彼處に一本好いのがありますね、丁度先生の通る處に』

かうお貞さんが言つた。

『あなたもさう思つて居たんですか……あれが實際綺麗なんですよ。夕方、歸つて來て、そら、彼處の橋のある處があるでせう。あの上の處から此方がよく見えるが、彼處から見ると、櫟や栗や庭樹などの暗く暮れかゝつた中にあれが一本はつきりと鮮かに出て居るんですよ。實に何とも言はれない、秋は今其一本にうの名残の色を留めてゐるといふやうな氣がしたですよ』

その銀杏も昨日見た時には、葉はもう残り少なくなつて、空しい枝が蒼く澄んだ空にさびしさうに見えて居た。秋はもう暮れ近い。

風が凄しく立つた。

硝子戸がガタ／＼鳴る。新しく張り更へた障子の中の室は常よりも明るく、床には茶の花が生けてある。

此頃、野に出ると、空の色、森の落葉、青々とした大根畑、心を惹くやうな景色が到る處にある。と、かう思ひながら、私は毎日電車の停留場の方に出て行つた。停留場に居る人は大抵知つた顔が多かつた。垣の角でよく邂逅す軍人や、田畝で一所になるハイカラな若い男や、お茶の水に通ふ肥つた娘や、勿論口を利いたことは一度も無いが、互に顔だけは知つて居て、あゝあの人は彼處に居るんだな、とよく思つた。

電車が停留場を出て、速力を早めたと思ふ頃、丁度代々木野が一面に見渡される。丘から丘に連つた新建の家屋の上に富士が白く見える。

町

縣廳のある町には一種のきまつた型がある。大抵封建時代の城址をろの公園にして、其一部に兵營があつたり、行政官衙があつたりする。そしてろの街には屹度東京の淺草公園とか大阪の千日前とかを小さくしたやうな賑かな一角を持つて居る。縣廳のある町は概して感じが淺薄で、何處となく氣分がそわそわする。繁華の程度が加はつて來れば來るほど、其土地固有の古

い空氣を失つて居る。廣島だの仙臺だの、岡山だの、福岡だの、何う觀察して見ても好い町だとは思はれない。すぐれた面白い處とも思はれない。ろれでもまだ昔のなつかしい空氣が何處となく残つて居て、士族町などに紅白の木槿の花の垣を見るやうな町が、その多い縣廳のある町の中にないでもない。若い娘達の紅い頬の中には、其土地の純な色と匂ひとを味ふことの出来るやうな處もないではない。そしてそれは多くは交通の不便な處とか、東京を遠く離れた所とかの町になる。弘前などはろの一つである。秋田もその一つである。山形も其一つである。

金澤は百萬石の城下と言つたやうな何處もなくボンヤリした處が著しく眼につく。堅い感じのする町、夜のさびしい町、家のつくりの陰氣な町、それに空氣に停滯したやうな佻しい氣分がある。富山は散漫な感じが第一に印象されて來る。昔の封建時代のカラゝなどといふものは殆どない。何だか新開地の町にでも來たやうな氣分がする。

縣廳のある町で、しかも東京に近く、最も發達しない町は浦和である。それに、此町は他の縣廳のある町とは違つて街道の一驛である。此町は他の町の輻射的に發達して居るのに引かへて、直線的に發達してゐる。裏町の淺い町である。

水戸、和歌山、名古屋——今では名古屋はぐつと群を抜いて了つたが、それでも何處か徳川御三家の城下といふ氣分には同じやうな處がある、しかし水戸も和歌山も餘り好い感じのする町ではない。馬鹿に廣い士族町も厭だ。それに水戸も和歌山も商業の餘り盛な土地ではない。水戸の如きは殊に甚しい。

四面山を以て圍まれた町には甲府と若松とがある。ろしてそれが種類こゝろ違ふが、一種の氣風を形ちつくつて居るのは面白い。一は甲州氣質、一は會津氣質。ろれが何方も規模の小さい、局量の狭い、しかも氣概の強い處に於て一致してゐるのは面白い。甲府も若松ももとは谷湖を成して居たといふ。猪苗代湖が若松

平野を浸してゐた時分には、甲府盆地はまだ富士川の疏水路を得なかつた。谷湖の址に築えた人間といふことは、地理學上面白い現象を呈してゐると言ひたい。

九州では、長崎が兎に角特色に富んで居ると思ふ。今は衰頹の氣分が街頭に遍く、對岸飽浦の機械の響が徒らに喧しいといふ感じを起させるが、其處には過古の種々の記念物が多く残つて居るので、それが旅客の思を誘ふに十分である。支那人の建てた寺院、オランダの昔を偲ばせるやうなしつこく彩つた硝子窓、古い寺の門の並んだ寺町通、山の手の西洋人の墓、昔の面影のいくらか偲ばれるやうな埠頭の賑はひ——私は朝早く汽船で海から入つて來

て、埠頭に近い西洋料理の汚い二階で、特色に富んだあの朝の賑はひを見ながら、拙いカツレツを食つた時のことを思出す。其料理屋では、上さんは眠さうな眼をして、半は裸體で、二つ位の子供を抱いて居た。皿を運んで來た女は油臭い亂れた髪をして、垢のついた白地の浴衣を着て居た。埠頭には傳馬が客を載せて行つたり來たりして居た。たふ／＼と岸を打つ鐵色をした海の上には、今着いた汽船が白い烟を薄く烟突から靡かせて居た。

熊本で旅客の眼を惹くのは、恐らくあの雄大な城址であらう。これを除いては此處には別に特色がない。一里ほど離れた水前寺は規模は小さいが、水の清いのが取柄である。町の街道には確か



ホブラが並木を成してゐたと思ふ。佐賀は縣廳のある町の中では、振はないさびしい町の一つである。西部の大分、宮崎などよりもつと振はない。

鹿兒島は成程昔他藩の人の入るのを禁じたといふだけあつて、感じが全く他から獨立してゐる。鹿兒島の人丈でつくつた鹿兒島の町と謂つたやうな處がある。町の中に萱葺屋根の交つて居るのが際立つて眼に着く。けれど感じは決して悪い方ではない。ことに櫻島を中心にした錦江灣の風景を前景にしてゐるので、一種爽やかな氣分を味ふことが出来る。夏の烈しい日の光、芭蕉の廣い葉に並んで百日紅の燃えるやうな色、南國の夏の暑さははつきり

した快感を與へた。

宮崎は町としては新開地だが大淀川の平遠な風景が餘程うれに趣を添へてゐる。此町には城址がない。うれが感じを薄くさせる原因の一つであるに違ひない。しかし交通の不便なところだけに旅客を不愉快にさせるやうないやな氣分はない。うれに、その周圍に、宮崎宮だの、青島だの、名所が多い。大分はむしろ其繁華を別府に奪はれたやうな町だ。

四國の松山は好きな町だ。城の高く見えるのも好い。うれに一體に町の通りが綺麗で、城址に近いあたりは鳥渡他に見られない一種の清さを持つて居る。士族町の中に普通の人の邸宅のやうな

料理屋があつて、雨の降る日に、三味線を復習ふ音がしめやかに聞えると言つたやうな風情はこの町でなくては見られない。しかし道後に接した方の町は汚なかつた。

山陰道では、松江が一番好い。城址の公園も、縣廳所在地の公園としては立派なものだと言つて好い。大橋の上から見た宍道湖は、丁度ベニスやうだなどといふ人もある。水の都、成程さうした處がある。一體この細長い出雲平野は、西と東に大海を帯びてゐるので、朝鮮海の雲や霧が、風につれて、絶えず其上を日本海の方へと漂つて行く。日は朝鮮海から出て日本海へ落ちて行く。宍道湖の夕日、その色彩の美しさは、私は他にろれに勝るものを見

たことがない。しかし秋から冬にかけては、風の寒い處だとは聞いて居る。

## 山にある友に與ふ

二天

秋がまた來ました。野分の晴れた朝などには、殊に君を思ふの情が切です。私は君と一緒に霧降に出懸けて行つたことを今でもはつきりと覚えてゐます。彼處へ行つて、まだ色氣のない田舎娘を對手に、持つて行つた瓢箪の酒を傾け盡した……。

此間、編輯局で、私の方の理事が、『昨日は豪い眼に逢ひました。二日の休暇を利用して、君の話にきいてゐる日光の奥へ出か

けて行つたところが、昨日の暴風雨に逢つて、それはヒドかつた。里から思ふと、山の荒れは想像することも出来ないやうなもんだね。……あんな怖い眼に逢つたことはない。』かう言つて舌を巻いて、『あの岩乗に出來た家屋が、今飛ぶか今飛ぶかと思はれるやうに、ミリ、ミリ、ミリツと言ふんだからね。……歸りも大變だつた。戰場が原ツて言ふ處などでは、大きな樹が縦横に倒れて、枝を切つたり、車をつかひたりしなければ通れない始末なんだからね。』僕にはろの山中の烈しい暴風雨がよく想像されるのでした。ろれに理事の泊つた旅館は、僕のいつも泊る旅館と同じであつたので、一層ろれがはつきりと想像することが出来るやうな氣がしま

二天

した。篋を傳はつて来る山の清水、大根のよく出来てゐる裏の畑、  
白髪の老いた主人——それが日光でも屈指の金持だといふことは  
曾て君から聞いた。ろの老主人には僕は十分懇意にして、圍爐裏  
を圍んで、戦争の話をしたり、主人の若い時の話を聞いたりした  
ことがあつた。ろの老主人ももうどうに死んで了つたと言ふでは  
ないか。

裏の二階の間から見ると、ろの老主人はよく畑で仕事をしてく  
た。

其傍には、落葉をかき寄せて焼いた煙が細く颯つて居た。をり

をり木枯がガサ／＼と枯葉を捲いて通つて行つた。

『御維新の時分は、私も若かつたですから、面白半分に戦争など  
に行つて、今市から會津の方へ行つたもんです。……何うなる  
ことかと思つて居ましたね。日光がこんなに開けて西洋人が来る  
やうになるなどは思ひもかけませんでしたからね。』

老主人は私を捉へて、よくこんな話をしました。

ろの老主人も死んだといふ。君はまた君で、君の思想の上におほ  
きな變遷があつて、生活状態にもろの結果を及して行かなけれ  
ばならないといふ。型にはまつたやうで、ろして型にはまらない  
のが人間の生活であると、僕はつく／＼思はない譯には行かない。

御存の通り、僕の日光は青年文學者の僕としての日光であつた。古ぼけた帽子を冠り、汚い木綿衣を着た僕の姿は其處にも此處にも見える。瀧見茶屋の上さんなどは、まだ僕の其時分を記憶してゐるものがあるかも知れない。僕は馬返のつた屋が好きで、よく其處へ行つては泊つた。深澤にもよく出懸けた。

僕は都會の刺戟を恐れた。何ぞと言ふと、心を動かし胸を騒がすやうなことが都會には多かつた。ろれに比べると、溪流の音だの、山の雲だの、高原の草花だのが、何んなに私に親しかつたらう。何んなに私にさまざまな興を興へて呉れたらう。私は毎朝、あの山門の前の小さな塙の上に立つて大谷の流に聞惚れる若い青

年の一人であつた。

僕は君に種々な文學者を紹介した。

當時名高かつた紅葉山人君にも君は逢つたことがある筈だ。あの裏の池の縁の四疊半で、僕が君に紹介すると、君は黒い僧衣の袖を合せて、丁寧に挨拶をした。風葉君、天溪君にも君は逢つた。従つて君は文壇のことにもかなり興味を持つてゐた。

中でも、君は獨歩のことを一番多く覚えてゐるだらうと思ふ。君の先師は、僕等貧しい青年文學者に、惜しげもなく廣い二階の四間を以てした。私達は其一間を食堂に、他の二間を各の書齋に、

残れる一間を寢室に使用した。今日でもろんな寢室と書齋とを  
つことこの出来ないほど贅澤な寢室と書齋とであつた。書齋にはテ  
ーブルがあり、安樂椅子があり、桐の大きな唐机があり、立派な  
溜塗の大きな硯箱があつた。寢室には、バネ入の寢臺があり、柔  
かい藁蒲團があり、ろれに、君の先師は、綿の新しい綺麗な蒲團  
を私達に借して呉れた。『貴族の若殿でもこんな贅澤は一寸出来な  
いね』私達はかう言つて喜んだ。  
ろくに、君はよくやつて来て、文學の話をした。  
『中々若い割に、物の解りさうな坊さんだね。』獨歩はこんなこと  
を言つた。

局外に居て、文壇の盛衰を見てゐる君などからは、文壇は果し  
て何んな風に見えることだらう？ 此間、逢つた時、君は『中央  
公論はもう十年から見てるが、大分小説を書く人も變つて来た。』  
と言つた。小説を書く人ばかりではない、小説も變つて来た……。

人間は自己の生活に何の意義をも感じないやうになることが往  
々にしてある。食つて、寝て、起きて……唯ろればかりだ。かう  
いふ風に考へることがある。

『徒勞』

ろの二字ほど、さういふ時に、有效に頭に入つて入るものはな

い。こんなに骨を折る、何の爲めに？　こんなに齷齪する、何の爲めに？　こんなに忙しい思をする、何の爲めに？

『徒勞だ——』

かう心の聲が言ふ。君の場合もさういふ風の一種の倦怠ではないか。

この一種の倦怠は、一方は感傷から来るし、一方は單調から来る。何うにもならぬ。實際何うにもならぬ。いつまで経つても同じだ。いくら感傷して、努力して、勉強しても、生活は變化しない。何の甲斐もない。かういふ心持だ。

僕の経験では、さういふ倦怠に耐へ得るといふことが、人生を

孤往獨邁するに際しての難關中の難關ではないかと思ふ。孤獨——それが古來幾何の人を狂せしめたか知れないではないか。

何が力強いと言つて、孤獨に堪へ、沈黙に堪へるといふこと位力強いことはない。自然を見給へ。自然位孤獨なものが世の中にあらうか。また自然位沈黙の極に達したものがまたあらうか。

——半生を山の中に暮し候へども、何等悟り得ること無之……徒らにすぎ去りし月日をかへり見れば自から長き夢のさめたるごときを覚え申候——

孤獨が生んだ寂寥——さういふ境から君は漸く出て来ようとするのではないか。しかし何處に行つても、この孤獨と寂寥とはあ

る。最後は屹度其處に落ちて行く。

君は孤獨の中に獨孤を意識せず生きて来た。今、始めて、孤獨が大きな力となつて君に對した。

——窓前に聳ゆる山なども今は却つて反感を惹起し申候、曾て心を澄せし瀧の水も今は寂寥を増すばかりに候——

寂寥は時としては友となり、時としては敵となる。ろして友となつても、敵となつても、非常に恐るべき力を持つてゐる。今、ろれが果して、敵となつて君の前に現はれたか何うかは知らぬが、兎に角、君はろれを問題にしなければならなくなつて来た。

僕は孤獨の中には生活しなかつたが、しかし孤獨な心持でこれまでも世を渡つて来た。従つて孤獨に就いては、随分思ひを致したことが多い。いつか僕は日光に居る間に、一週間、山の奥に入つて行つたことがあつた。モウバツサンの作の中にあるゲンミイ越の話も思ひ出されるやうな深山だ。三里四里と行かなければ人に逢はれないやうな山陰に、一軒の樵夫の家があつて、其處に若い二人が住んで居た。

『さびしいだらうね……こんなところに住んでゐては。』

『いゝえ……少しも。』

かう若い上さんは答へた。



ろれが私には不思議だつた。しかし十五六年も経過した今では、その山中に生活した若い夫婦の心持が私にはよく解つた。意識せざる孤獨生活。

君。

僕は君とは正反對の境遇にゐる。君は倦んだ單調な生活から出て來たいと思つてゐる。僕は賑かな騒がしい世の中から背いて去つて了ひたいと思つてゐる。一は孤獨を敵とし、一は孤獨を友としてゐる。

陋劣なもの、卑劣なもの、腐敗したもの、人の心を刺戟して止まないもの、虚偽なもの、策略多い手段のやうなもの——さういふものから遁れ度い、暫しの間でも好いから遁れたいと思つてゐる。

ろれから身を縛るものからも一切遁れたいと思ふが、これなどは、君とは殊に正反對な考へである。君はやはらかな束縛を望んでゐる一人である。

僕は時々かういふ考を起すことがある。今の自分の遣つてゐる生活は虚偽だ。さういふ虚偽からは絶対に離れるつもりで營んでゐたのに、いつの間にかさういふ虚偽の心の蠶食してゐるのに氣が附かなかつた。恐ろしい爾虚偽よ。

で、僕は生活の新規やり直しをしようとする。ろしてろの新規やり直しのいかに困難なるかを思ふ。此處から望見して想像したことゝ、そこに行つて突當つたことゝの相違を、さういふ時は僕はよく考へる。

出来るものならば、あらゆるものから離れて去り度い。妻や子の顔を一生見ないことが出来るなら、何んなに心に喜ばしい自由を感じるだらう。毎日逢ふ顔、毎日社で口を聞いたり笑ひ合つたりする顔、文學上の交際で逢つて知つてゐる友達顔、さういふものから總て離れ去つて、今度は丸で知らない顔にばかり邂逅するやうな新しい生活に入ることが出来たら、何んなに嬉しく、何

んなに喜ばしく、何んなに自由なことであらう。其時ころ鳥のごとく飛び、獸のごとく躍り廻ることが出来るであらう。もしそれが出来るなら、何んな生活でも構はない……こんなことを空想するほど、僕の心は生活に疲れてゐる。

洗濯しようにも洗濯し甲斐のないやうな生活だ。

君に始めて逢つた時のことをふと思出した。君はあの時足尾に居た。僕は二十で、君は十七位だつた。僕は中禪寺湖畔から風雨を衝いて足尾に行つた。確か足尾の赤倉といふ小字のついた寺に君は居た。寺の名は忘れた。君は赤い頬をした美僧だつた。ろの

時、何ういふ風にして、君と僕とが懇意になつたか、それは忘れて了つたが、兎に角、君は天野爲之博士の論理學講義か何かを讀んでゐた。僕にいろいろなことを尋ねた。哲學の話などもした。あの時分のことを考へると、かうも違ふものかと思はれる。あの時分には、善からうがわるからうが、兎に角前途があつた。知識がなかつただけりだけ、前途に希望を繋ぐことが出来た。私達は希望ある旅に上る人達のやうな若々しい心持で話し合つた。僕はその時素麵を御馳走になつたことを記憶してゐる。雨は終夜音を立て、降つた。

其翌朝、雨を衝いて、渡良瀬川に添つて、上州の大間々に出た。

其頃と今との相違は、唯に生活そのものが違つてゐるばかりではない。肉體も精神も境遇も、鳥渡其頃には想像が出来なかつたやうなものだ。存外容易いライフではあつた。存外展開すべき方面に展開して行つたライフだつた。しかし今の疲れた、衰へた、そして神經的に複雑な生活を其當時に想像することが出来たであらうか。それはとても出来ない。

君だつてさうだらう。あの足尾の寺に居た頃と今の相違は殆ど問題にならないほど違つてゐるだらう。其頃では社會に出ての成功不成功が大きな問題であつたが、今ではそんなことは問題ではない。實際の問題が餘程心の問題になつて來た。従つて自己の問

題になつて来た。

つまり中心に觸れて来たのである。自己が満足しきへすれば、それで好いといふことになつたのである。

従つて、君の孤獨生活から出て来るのも、僕の孤獨生活に向つて入らうとするのも、共に生活の止むを得ない運動で、そこに面白い孤獨と自由の反映を見ることが出来る。

僕は深山の奥か、絶海の孤島か、さういふところに行つて、新しい意義のある生活を作りたいと、今でも思つてゐる。勿論、それは消極的な追憶的生活ではなく、自から働いて自から食はう

とする積極的の生活である。

他人を相手にした生活でない生活、自分の自由を少しでも妨げるものゝない生活、さういふ生活が、私には一番適して居ると私は思つてゐる。僕は山から山へ移住して行く木屋の生活や、天と地とより他に何物もないやうな廣い *steppe* に生活してゐるロシアの民などを考へて見ることが多くなつた。

君。

君の先師は曾て北海道の移住を僕に勧めたことがあつた。『お百姓に限る——』かう言つてあのにこゝした顔に笑を湛へて、私に言つた。それを北海道すきの獨歩が評して、『流石は中年から僧

になつただけあつてその言ふことに味がある』と言つた。それから、君の居た足尾の寺の師匠も北海道に行つたと言ふではないか。廣い野、廣い自然、何百年斧斤を入れたことのない大森林の裡へ！  
ろれにひきかへて、これから山を出て、孤獨生活を去つて、都會の烈しい巴渦の中に出て來ようとする君、ろの君と僕との心のコントラストに人生があり自然があると僕は思ふ。さらば——

## 人生の一宿驛

今年ほど暖かな年はない。雪がまだ一度も都の瓦甍を白くしないのでもそれがわかる。ろれに風がない。静かなのんびりしたやうな日が毎日續く。私は長い間病床に居て、野に蒨え出づる青い草を思つて居た。

病氣になどなつたことのない男が、かうして長い間身を床に横へて居るといふことは、尠くとも其男の生活の一變化であつた。

昔のことがよく思ひ出された。忘れて居たことが思ひもかけず蘇つて来た。私は細君を捉へて、自分の十歳位の時の話を幾度ぞなくして聞せた。

『さうですかねえ、貴郎はそんな子でしたかねえ』  
細君はかう言つて笑つた。

二子縞の短かい衣服を着て、前垂をした稚い自分の姿が其處にも此處にも見えた。泥濘の深い大通を乗合馬車がガタ／＼と通つて行くと、それと自分は競走していつも驅けて行くのが例であつた。時にはまた物賣店の前に立つて、十分も二十分もちつといつ

までも見て居るやうなこともあつた。腕白な悪戯な頑童！ ろれがさま／＼な場所に置かれて見えた。

京橋から日本橋の間は、何んな日でも通らない時はなかつた。其頃流行つた唄などを唄ひながら、わざと家々の軒下を選んで通つた。雨の中にしるしのついた番傘をぐる／＼廻しながら走つて行つた自分は、今かうして此處に寝て居る。其間に三十年の月日が経つてゐる。

三十年と謂へば、この正月の七日に、私は義兄の家に呼ばれて行つた。それは亡姉の三十年忌に相當したからである。ろの姉は三十年前に二人の幼い兒を残して肺を病んだ死んだ。年は二十三

位であつた。其時分、私はよくこの姉の世話になつた。蕎麥屋に  
 など度々伴れて行かれたものだ。ろの三十年忌を其同じ家、其の  
 同じ二階でやつた。

義兄はもうお爺さんであつた。後妻に來た義姉は、腰を曲げて、  
 シメのついた櫛を、ろの亡姉の神前に捧げた。私達は昔のことを  
 考へずには居られなかつた。

其二階からは富士が見えた。其二階の欄干は私が七八歳の頃、  
 母親に伴れられて、凭りかゝつて富士を見たらうの同じ欄干であつ  
 た。私は夕日の消えて行くのを見ながら、其時分のことを話した。  
 『随分、いたづらな兒だつたよ』義兄はこんなことを言つて笑つ

た。

何も彼も過ぎて行く。何處へ？

さうしたことを考へるやうな氣分の日が多かつた。努力、勞働、  
 奮勵——さうしたものに欺かれて送つて來た日が更に振返つて考  
 へられた。

空虚——何も彼も空虚だ。

でも、私に取つては、まださうばかり言つても居られないやう  
 な氣分が保留されてゐた。

私は絶えず五六年以來のことを振返つて見るやうな人であつ

た。混亂した、雜り合つた、何處からこゝらがつた絲を引出した  
ら好いかと思はれたやうなゴタ／＼した精神生活の中から、今で  
は私は尠くとも一步を踏み出して居る。言ひかへて見れば、離れ  
て來て居る。觀照の出來るやうな立場に立つて居る。

長いライフの中の一宿驛——私は今通つてゐる一宿驛のさまが  
絶えず頭を通つて行つた。前の三十年、それは現に自分が通過し  
て來たのである。後の三十年、それは自分が通過して行つた人々  
の状態を明かに見て知つてゐるものである。だから今ゐる一宿驛  
に立つて展望して見ると、輪廓だけかも知れぬが、兎に角長いラ  
イフの眞の状態が分明と眼に映つて來る。其處から生れて來た氣

分——それを私は病床に身を横へながらつく／＼と考へて見た。  
物に壓迫せらるゝやうな心持のなくなつたことが一つ。物を恐  
るゝといふ念のなくなつたことが一つ。今一つ最も大切なのは、  
自己を自己として見るが、自己を自己として他人の中に立てや  
うとする念の薄くなつたことである。

何うでも好い。無論さういふ心持ではない。さうかと言つて、  
自暴自棄と言つたやうな烈しい心持ではない。靜かに考へよう。  
靜かに人生のことを考へて見よう。さう言つたやうな心持である。

靜かにして居たい。世の中の波の巴渦の外に居たい。ろしてろ



れをぢつと見て居たい。

批評家の間には客観化といふことが容易く言はれるが、實際、客観化といふことはさう容易く言はれることだらうか。

客観化と言ふことは、其人々の心持が世相の千變萬化を見たり聞いたりした上に自然につくられて来るものでなくてはならぬ。また、作者が自然に持つて生れて来たものから流れ出して来るやうなものでなくてはならない。

客観化の十分に加はらない作品は、決してすぐれた藝術品と言ふことが出来ない。また客観化の十分でなは批評は、創作的批評

と言ふことが出来ない。

病氣が治つてから、私は郊外に散歩に出かけた歸りに、ある町の大通りを通つた。それは大きな青物市場があつたり、遊廓があつたり、大きな橋があつたりするやうな通りであつた。

私は何年にもこの通を通つたことがなかつた。で、昔のことが流るゝやうに私の胸に押寄せて来た。それは丁度二十五六年も前のことで、私はその近處に居る友達と一緒に、よくその橋の下から舟を借りて、東京のセイヌとも言はれるこの川を漕ぎ廻つた。鐵橋の桁に舟を繋いで、橋の畔で買つて来た稻荷鮓を食つたり、

下流の竹藪の陰の渡船小屋に水を貰ひに上つて行つたり、蘆荻の中に、全く舟を埋めかくして、ろこで空を仰ぎながら大な聲で詩を吟じたり、私の書生時代は、多くさうしたことには日が費された。其の河岸は依然として材木屋の多い河岸であつた。橋の袂には、矢張貸舟をするろの舟宿があつた。向ふ側には、汽船の發着所が昔のまゝになつてゐて、白いペンキ塗の汽船の煙突からは、白い煙が絶えず川になびいてゐた。橋の上は昔のやうに矢張ぞろ／＼と車や馬車や人が通つて行つた。

其時、郊外にあるある小さいさびしい田舎町を私は通つた。島から入つて来て島の中に出て行くやうな町であつた。それは折れて曲つた通りで、中程に廣い川が流れて居た。そこに架つた橋では、五厘の橋錢を取つた。橋の板は半は朽ちてゐた。昔は大きな街道筋の一宿驛で、大名の行列も通つた町であつた。大きな旅館などもあつたに相違なかつた。それが今では全く繁華から離れ、活動から離れ、すぐ近くを走る汽車の停車場さへも、名もない村に奪はれて、此處にこの町があるといふことは誰も知つてゐるものはない位であつた。町に漂つた衰殘の空氣——それが不思議にも私の心をおる離れ

たアーチスチックな境につれて行つた。ロオデンバハのブルージュの町に於けるやうに、この衰へた町を歌ふ詩人が一人位あつても好いと思つた。白い壁、軒の低い家と家との間にある青い菜の畑、大和障子のピツシヤリ閉つた茅葺屋根、静かに餌をあさつてゐる鶏、其處等にさびしさうに遊んでゐる子供、何れにも一種面白いカラーがあるやうな気がした。

都會近くにかうした衰へた町があるといふことが特に私の心を動かしたらしかつた。私は静かに其町の通りを歩いた。

(明治四十五年)

草津から伊香保まで

高原から下りた處には、兩岸から絶壁が迫つて、綺麗な谷川が流れて居た。

朝から晴れたり曇つたりして居た。時には雨も來た。日影を受けながらサツと降つて通る氣まぐれな雨、谷川の橋を渡る時には、私は蝙蝠傘をさして居たと記憶して居る。

胸を突くやうな坂、雨と霧とに滑る山路、雜草の中には大きな

山百合が俛首れて咲いて居た。霧の間から見えて隠れる木立の幹はあたりを何處さなく深山らしく見せた。

僕もよ  
母れ親  
母れ親  
へ止宿し  
ふりか  
ツクヨ  
三イ合  
屋

若い私の體には元氣が充ちて居た。十二三里を歩くのは、さう大したことには思つて居なかつた。草津から伊香保まで。其間を一日に歩くつもりで、今朝早く草津の旅宿を發つて來た。暮阪の峠の上には、瀟洒な茶店があつて、其處では老婆がラムネを冷たい水に浸して客を待つて居た。吾妻川の溪は狭く前に展けて、特立した岩山が面白い形をして其處に聳えて居た。山は少くとも其谷を面白く見せた。霧が晴れたり懸つたりして、時にはその一端が日に照されて美しく輝きわたつた。峠から下り

て行く路は、其の岩山の麓をぐるりと廻つて、澤渡の温泉の方へ出て行くやうになつてゐる。

不思議にも其岩山は今に至るまで、私の頭に分明と印象されて残つて居る。私は其山について、いろ／＼な想像を逞うした。その山を題材にして小説を書いたこともあれば、若い空想を驅つて其の麓に若い男女と老いた夫婦とを置いて見たこともある。こんもりと影の濃い緑の深い岩山、ろれに狭められて二筋にわかれて行く溪流、私は何處に行つてもすぐろれを思ひ出した。

谷の開けて行く岸に沿うて、二階家、欄干、家毎にある温泉宿の古い看板などを持つた狭い村落が其前に開けた。家と家との間

からは、浴衣を着た人達が出て来た。

こゝから一支流を併せて、吾妻川の谷は段々と開けて行つた。

玉蜀黍の畑が路傍に廣く現はれるやうになつて来た。岸の淡竹の

藪の向ふには、水が青く淵をたへて、筏が繪のやうに静かに滑

つて行つた。顧みると、草津の方は雲が深く鎖して、其の面白い

山が僅かに半面を見せて居るばかりである。

翠微を出てから、暑さは加つて来た。畑の色も暑ければ、茅葺

藁葺の家も暑い、緩やかになつた川はもう興味を惹くやうなこ

ろもなかつた。中條の町はこの暑い平凡な空氣の中に古びた板葺

茅葺の屋根を見せて居た。

五町田の渡船はそれでも風景に富んで居た。水は餘りに長い平

凡に堪へないといふやうに、一ところ凄じい勢をなして流れた。

渡船小屋は疎らな林の縁にあつて、此方から呼ぶと、爺が聲に應

じて出て来た。舟は渦を衝いて凄じく流れる。それを爺は巧に棹

に撐へて、岸へくと近寄つて来る。

『伊香保へは二里ちや』

ぶつきら棒に言つて、額ににじんだ汗を拭いた。

それは草藪から草藪へと續くやうな路であつた。萱や薄が人の

肩も見えぬばかりに生ひ茂つて、をり／＼見る一軒屋には、桔槔

が高くかゝつて、甜瓜が黄ろく熟してゐた。

鈴蟲が頻りに啼いた。

午後四時過の日影は谷に添つて曲つて行く草原路をまともに照した。周圍の山はもう餘程趣をかへて居た。草山でなければ、疎らな灌木の林が山を蔽つて居た。谷は暑い日影に全く渴したもののやうで些やかな水聲をさへ立てなかつた。私は涼しい木蔭と水聲とにあくがれながら歩いて行つた。

山に凭り深に架した伊香保の人家が、蜃氣樓のやうに向ふに見えた時には、私は思はず喜悅の聲を擧げた。

午 前

私が墓地に行つた時には、まだ誰も來て居なかつた。それではこんな急いで來るのでなかつたと思ひながら、私は私の家の墓の前に立つた。

祖父母に嫂に母に兄に兄の子。この三坪の墓地の中には、これだけ私の家の人々が埋葬されてある。しかし墓石はまだ一箇も立てなかつた。二年前に死んだ兄の墓標の上には、嫂の死んだ時

に植ゑた松と楓とが見事に繁つて、晴れた午前の日影を美しく篩して居た。

盆の十四日——今日墓石を立てることになつて居た。

規則正しく縦横に仕切られた路には、墓詣の人々が線香を持ちたり花を持つたりして歩いて居るのが彼方此方に見えた。綺麗な細君の後からは、手桶を下げて、櫛と帚とをかゝへた茶店の女が跟いて行つた。

墓地の午前は静かであつた。

私は暫く立つて待つて居た。しかし誰も容易に來なかつた。少くとも伯父（死んだ嫂の父）は來さうなものだ。私は通の方に少

し出かけて見た。

果して伯父が向ふから來た。

大通から此方に入つて來る通には、樹が一とこ深く繁つて居て、日影が舗石道の上にチラ／＼と動いた。其處を古い麥稈帽子を冠つて、紺緋の單衣を着て、齒のある下駄を穿いて、テク／＼歩いて來るのが伯父である。

伯父はもう七十を越して居た。丈夫な方ではあるが、眼が悪いので、歩くのがいかにも不自由しかつた。四五間の前まで來ても、私の其處に立つて居るのが解らない位であつた。

『まだ石屋が来ませんか』

私はかう言つた。

伯父は萬事石屋の世話をして居た。

『今、もう、其處に來ました。私はさつき一度此處に來ましたけれど、先に出た筈の石屋が見えないから、通に出て見ました。もう來ました』

伯父はかう靜かに言つて、腰を後に伸す様にして、

『路が悪いものだから、大通りに四ツ谷に出たさうですから』  
言葉を續足して言つた。

車の音がしたと思ふと、やがて其處に鐙の大きな麥稈帽子を被

『これは御難だ!』

つた石屋の男と、綱を曳いた運送屋の男とが見えて、續いて馬が見え、運送の馬車が見え、白い股引を穿いた二人の若者が見えた。で、かれ等は暫し立留つて此方を見て居たが、私が手招きをするど、其儘舗石道をガタ／＼と勢込んで馬車を引込んで來た。  
墓石は筵やアンペラで丁寧に入れて載せられてあつた。  
私達の立つて居る處から墓地までは、馬車は引込んで行かれなかつた。其間は十五六間あつた。

石屋はこんなことを言つた。で、先づ一服と言つた調子で、要垣の日蔭のところに蹲踞んで、腰から煙草入を取つて、マッチを



擦つた。原の路の悪かつたことなどを互に暫時は語り合つた。

『君、手傳つて呉れ』

石屋が運送屋に言つた。

『馬鹿を言つちや困るせ、君。運送屋は運んで來さへすれや好いんだ』運送の男はかう言つて笑つたが、しかし運ぶ時には、一番多く其力を見せて、大きな石は大抵其の男が運んで行つた。

『君は豪えよ。だから、今日も君に頼んだんだ』

石屋が馬車の上から其男の肩に石を載せながらかう笑ひながら言ふと、

『旨くおだてやがる』

運送の男は、顔を眞赤にしてゐた。

石屋の連れて來た二人の若い男は、成たけ小さい輕いのを選んで運んだ。

墓地の前はやがて石で一杯になつた。私は、掉石に彫つた字の出來具合などを見た。

其字はつい四五日前に田舎の隊に歸つて行つた軍人の弟が書いた。祖父母の改名、兄の改名、嫂の改名。それに、死んだ年月日。父母の墓石の方には、ザツと父親の戦死した傳記を漢文で書いた。『兄さん書かないんなら、己が書くさ、』かう言つて、弟は書

齋の六疊に繼いだ白紙を一杯にして、半日かゝつて一生懸命に書いた。そして、『何うだ、旨いもんだらう』などと言つて私に見せた。

『大きい兄さんが生きてると、この漢文ももつと旨く作つて呉れるんだがなア』

こんなことも言つた。

兄は長い間墓石を建てることを口癖のやうに言つて居た。其志を齋らして、兄は死んで行つた。

石屋は仕事に取懸りながら、

『これあ、この木があるんで涼しくて助かる』

それほど松と楓は繁つて居た。で、また其樹を植ゑた時の話が伯父の口から出た。それは兩方とも嫂が十五位の時、山から採つて來た芽生を移し植ゑたのであつた。

『ザツと三十年になる』かう伯父が言ふと、

『ハア、三十年、この位になるに三十年かゝりますかなア』

石屋は茂つた松を仰ぎ見た。

二人の若者は先づ地ならしを始めた。糸を引いて間敷を計つて、墓石を立てる位置を定めて、さて今度は、不用になつた兄の墓標を引抜いて、それを地行の棒杭に使つた。

『よいこりや、よいこりや』

三人は戯談のやうな懸聲をして地行を始めた。墓標が松や楓の枝につかへて、下すのに充分力が入らなかつた。若者達はよいこりや、よいこりやと笑ひながら暢氣に囃した。

『おい、もつと身に染みて遣なくつちやいかんぢやないか』石屋も笑ひながら言つた。

後には二人の若者の細いへこ帯をつないで杭に結び付けて、それを持つて地行を續けた。

伯父は涼しい樹蔭に其の老いた姿を見せて、黙つて蹲踞んで居た。私は臺石の一つに新聞紙を敷いて腰を休めた。

墓地の午前は静かであつた。向ふには赤煉瓦の兵營が低く谷を

隔てゝ見えて、其處を通る電車の線がをりくゝ唸るやうに響いて聞える。兵士の射撃を練習する彈丸の音も絶えず空に鳴つた。

其の彈丸の音が私の心に種々なことを思ひ起させた。

『あそこでは兵隊さんがいつでも彈丸を打つて稽古をして居るねえ。恐いやうだねえ』母は墓參から歸つて來るといつもかう言つた。

地行は濟んで、やがて石屋は臺石の据付けに取り懸つた。間違はぬやうに豫めつけて置いた三角だの菱形だの、印を相圖に、石を彼方此方から集めて、平らにならした地面の上に据ゑた。

間もなく臺石の据附が出来た。

私は、伯父に言った。

『うれちや伯父さん、私は是非今日やらなければならぬ用事が  
ありますから、これで御免を蒙りますよ』

『あゝ、さうですか、何うぞ、』

伯父は帽子を取った。

緑葉に日影のチラ／＼する間を私は歩いた。

ある墓場の入口に、俣が二臺置いてあつて、其處で車夫が汗を  
拭いて居ると、中の大きな墓石の前には、袴羽織の夫と紋附の綺  
麗な若い細君とが恭しく並んで、墓前の掃除を婢のしてゐるのを

待つて居た。

線香を持つたり櫛を抱へたりする人々にも幾組か逢つた。

私は墓の中を段々通の方へと出て行つた。明るい日の中を人々  
は皆な紹や帷子を着て、暑さうな顔をして歩いてゐる。私は、手桶  
や、櫛や、線香などの置いてある茶店の前から、櫻の葉の深い影を  
つくつた細い通に入つて行くと、寫真屋の看板、琴の音のする二階  
屋、角の小さい氷店、其の向ふには電車の通る大通が見えて、演  
習の兵隊さんがぞろ／＼と通つて行つた。

椿

椿  
終

三〇

大正二年五月五日印刷

（定價金三十五錢）

著者 田山花袋

發行兼印刷者 高倉嘉夫

不許複製

東京市神田區今川小路二丁目十七番地  
印刷所 忠誠堂印刷部

發行所

東京市神田區今川小路  
二丁目十七番地

忠誠堂

電話本局四九六六番  
振替東京二〇四三一番

文學士 大町桂月  
文學士 久保天隨  
文學士 鹽井雨江  
文學士 白河鯉洋  
水野葉舟  
金子薰園

講述

# 書翰講義

版一十四  
本書は、書翰といつても單に候文だけのことは、  
廣い書翰で、あらゆる通信文を總括して居る。この通  
信文が拙いたため、社會に活動が意の如く出來ない者  
少くない。本書はこれを慨して、書翰必得、論說的書  
翰文、歐蘇手簡講義、書翰實地研究、公用文解說、書  
繪葉書、情愛の書簡、販賣書翰の作法、慶賀文の講  
方と其例、手紙の作例などを諸先生各分擔して講  
せられたもので、内容の眞價は、書翰に對する感懷作  
法、説き得て餘すなく、世間並の没趣なる作法、  
と同一視すべからず、單に讀本として面白き程に  
來たり。『萬朝報』の評でも推することが出書

菊版千五百頁  
定價金一圓五十錢  
特價金一圓十六錢  
郵稅金十六錢

發行所 東京東區神田路小川今  
振替東京東區本局四九六  
電話一三〇四六

山岡劍山先生著

# 三版 乃木大將傳

全一冊

菊版クローズ綴函入・寫眞アート紙十葉入・定價金壹圓  
特價金七十五錢 送料金八錢

御大喪の當夜壯烈なる殉死を遂げた乃木將軍は、我が  
六千萬同胞の赤き心を代表して、鮮血の大花輪を捧げ  
たのである。嗚呼大將は如何なる人であつたぞ。天下の  
人は悉くこれを知つて、君國に忠誠を擢でなければな  
らぬ。本書は、將軍の眞面目を遺憾なく描き出した精  
細な傳記である。而して附録に添ふる將軍夫人傳、及  
び現代數十名士の殉死夫妻八面觀も、亦將軍と共に我  
が國武士道の精を發揮した活文字である。乞ふ一讀を  
賜へ。

發行所 東京東區神田路小川今  
振替東京東區本局四九六  
電話一三〇四六

諸名家  
執筆

現代小品叢書

菊判半截版裝幀頗  
優美紙數約三百頁餘  
正價一冊金三十五錢  
郵送料一冊金六錢

田山  
花袋  
氏著

椿

第一篇

正宗  
白鳥  
氏著

青蛙

第二篇

内容から言つても形式から言つても、自由  
で、清新で、且つ讀むにも丁度手頃の小品  
文。書齋にある時は勿論電車の中でも、  
瀛車の中でも、散歩の時でも、寝轉んで  
居る時でも、一寸讀んで見られる小品文。  
さうして少しも爲になる事、面白小事を  
知らうとする賢い人に向つて、茲に現代小  
品叢書は無比の廉價を以て提供された。是  
れ名流大家が其の苦心の作より精選され  
たるもの、蓋し愛誦措く能はざるものある  
に相違ない。今や既に其の第一篇として田  
山花袋先生の『椿』出て、第二篇として正  
宗白鳥先生の『青蛙』將に世に出でんとす。  
續々愛讀を賜へ

第三篇途

上前田 晁

第四篇砂

丘吉江孤雁

第五篇題未定 窪田空穂

第六篇題未定 島村抱月

發行所 東京 神田 忠誠堂 振替 東京 〇四九六一 電話 本局 四九六六

94
794



終

